

■ライトノベルとは？

ライトノベルと言えば、ティーンから 20 代前半までを対象とする、読みやすく書かれた娯楽小説で、アニメ調のイラストを多用している……等のイメージがある。しかし、現在、ライトノベルの内容は多岐に渡り、30・40 代もターゲットになっている。そのため、蟬川氏は「ライトノベルとは、ライトノベル専用レーベルから出版された本、と定義するしかないのではないか」と言う。

作家側の事情として、難しい語彙を使うと編集者から改められることがある。各キャラクターの設定を細かく決めてから、ストーリーが作られることもよくある。このように、ライトノベルには、文章に入りやすくするための工夫も多い。ネット投稿の経験から、蟬川氏は、今の若年層は感情移入の能力が低いと感じている。イラストから入る読者も多く、逆に、文章で書くべき内容をイラストの描写で済ませてしまうような本も出てきた。

■ライトノベルは、国語の教材として扱うことができるか？

蟬川氏は、特に「読解力」を鍛える目的の題材として、ライトノベルは適切でないと考えている。（もちろん、例外もある。）読者がそういうものを求めていないので、作家も提供しないのだ。

純文学や大衆文学は、言わば「圧縮」されて書かれている。読者は、行間を読み取ったり、情景描写から心情を読み取ったりして、「解凍」しながら読んでいく。その解凍の仕方に、その人自身の経験が反映され、予備知識等が問われる。読み手の自由度が高い。

一方、ライトノベルは「圧縮率が低い」。読者からは、読み取る労力が少なければ少ないほど歓迎される。よって、平易な語彙を用い、テンポよく事実を述べ、分かりやすいシグナルを多用した文章になりがちである。読み手は、一本道を歩かされている感覚である。テレビやアニメ、ゲーム他、多くのメディアも同様で、読者はそれに慣らされている。

〈参考例：「山月記」をライトノベルに書き改めるなら……〉

だが、10 分間読書には、ライトノベルは非常に有効だと考える。語彙が少なく、読解力に乏しい若者にも、読書の入り口として最適である。しかも、ライトノベルは今や 380 億円市場にのぼり、多様なものが既に用意されている。ライトノベルを通じ、語彙を少しずつ増やすことで、読書の幅を広げていくことが可能になる。実際、分科会の参加者からも「ライトノベルの楽しさから入り、今は純文学を読んでいる」という声があった。

さらに、参加者から「確かに、ライトノベルで読解のテストを作るのは難しいかも。話し合い活動には使えると思う」という意見も出た。蟬川氏は「将来、ライトノベルも扱えるような国語教育の方法論が必要となるかもしれない」と応じた。

参加者の多くが既にライトノベルに親しんでいた。蟬川氏より刺激的な観点をご教示いただいたことで、その楽しみがより深まると期待する。蟬川氏、ありがとうございました。